

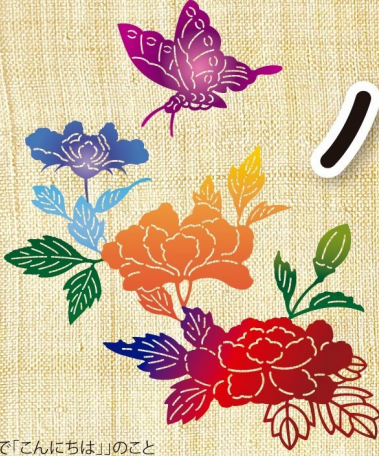
9

月

Sep.2025

沖縄開教本部通信
vol.119

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと



ハイサイ 沖縄



「コーヒー 沖縄のニューフェイス」

沖縄県工業技術センター 豊川哲也

本シリーズも、最終回である第五回目になりました。今回は、沖縄食材のニュー・フェイス「コーヒー」を紹介します。

コーヒーは、赤道から南北の緯度二十五度のエリアで栽培されます。

沖縄は少し北の北緯二十六度に位置していますが、海洋性気候のためギリギリコーヒー栽培が可能な地域です。

しかし、このギリギリということ栽培が難しいということと同義です。さらに、コーヒーは熱帯産の植物であるにもかかわらず、なんと暑さ寒さが苦手です。沖縄の有名な歌手である古謝美佐子さんの曲「童神（わらびがみ）」には、愛おしい子を育てるために「夏の季節がくれば涼しい風を送り、冬の季節には懷に抱いて」あげるのも苦ではないという意味の歌詞がありますが、コーヒー農家さんも同じくコーヒーの木を夏の日差しから守るために木陰を作り、冬の北風を防ぐため防風ネットを張ったりしているんです。

そうして栽培される沖縄産コーヒーですが、その生産量はわずか二

トン程度と非常に希少です。そのため生豆一キログラムあたりの価格は五、六万円、コーヒー一杯が二千〜五千元と非常に高価格です。

そして、意外と知られていませんが



コーヒーの花と果実。花はジャスミンのような香りがします。

コーヒーは発酵食品なんです。コーヒーを収穫した後には果実を発酵させて豆だけを取り出す、プロセスシングという過程があり、この工程では酵母や乳酸菌などが繁殖してコーヒーの風味の一部を作り出します。しかも、この発酵菌はモカ、マンデリン、コナといった地域で異なるため、地域独特の風味の形成に役立っているといわれています。沖縄にいる発酵菌はどんな特

徴があるのでしょうか。きっと、沖縄人と同様にのんびりして明るく楽天的な菌に違いありません。

そんな高価なコーヒーの風味がどのようなものか気になりませんか。コーヒーの風味は、畑の違いや収穫後の処理といった原料の違いや、コーヒーを淹れるときの焙煎度や抽出温度により変化するため一概には言えませんが、私の感想としては酸味・苦味がすくなくすっきりしたクリアな風味ですよ。

さて、これまで五回にわたり沖縄の食材や食文化をご紹介してきました。たった五回の紙面では紹介しきれないくらい、沖縄には美味しいものがいっぱいあります。スーパーや通販で手に入るものもありますが、現地で味わう食材はまた違った趣があります。ぜひ、沖縄にお越しいただき美味しいものを食べてください。



一杯数千円の沖縄産コーヒーまるでワインのようです。

【沖繩菩提樹協会主催 戦没者追悼式典】

七月二十八日、糸満市の沖繩菩提樹苑にて、戦後八十年の戦没者追悼式典が執り行われた。沖繩菩提樹協会会長の長嶺信夫医師と共に、二十万余人が亡くなった沖繩の地へ、インドから菩提樹の分け樹を送ろうと尽力された、サールナートのジャンブドウィーパ・スリランカ仏教寺院の高僧であり、インド・スリランカ国際仏教協会の会長でもあるK・シリ・スメダ師が招聘された。

戦後八〇年「慰霊の日」

六月二十三日沖繩県は戦後八〇年の「慰霊の日」を迎え、糸満市の平和祈念公園では、沖繩全戦没者追悼式が催された。

公園内の「平和の礎（いしじ）」には、遺族が参拝し、今回も新たに三四二人の名前が追加され、刻銘者総数は二四万二五六七人となった。

式典では、玉城知事が「平和宣言」を読み上げ、沖繩戦の記憶を継承するため戦争遺跡群を整備し将来的に世界遺産登録を目指すとしたうえで「戦後九〇年、一〇〇年を見

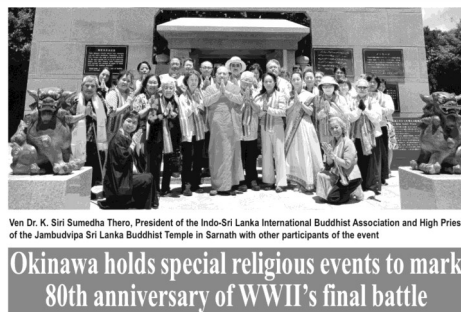
別院では土曜礼拝に来てくださる皆さんと一緒に参列し、スメダ師の読経と御法話を聴いた。「一切皆苦」や「四苦八苦」についてお話しされた。また記念撮影の時にはパーリ語で三帰依文を一緒に唱和した。「デーラワード・大乘・密教と大きく三つに分けられる仏教だが、国境を越えて、各国の文化を受け変化し違いはあっても、同じ仏教徒であることに信頼と親しみを感じる。それはインド国内でヒンズー教徒と仏教徒が同じインド人と

据えた長期的な視点に立ち、沖繩が果たすべき役割を掲げ、世界に発信する」と述べた。

体験者から直接話しを聞く機会が減っていく今、沖繩戦の実相を伝えるため、旧日本軍が首里城の地下に造った司令部壕などの戦跡を「物言わぬ語り部」として活用したり、平和教育にデジタル教材を導入したりする取り組みが広がっている。

県内には今尚生活を脅かす不発弾が残され、遺骨収集は難航している。そして

して信頼しあって共に生きることに同じ。」とお話くださった。



Ven Dr. K. Siri Sumedha Thero, President of the Indo-Sri Lanka International Buddhist Association and High Priest of the Jambudipa Sri Lanka Buddhist Temple in Saranath with other participants of the event
Okinawa holds special religious events to mark 80th anniversary of WWII's final battle

スリランカの地元紙でも取り上げられた

「戦後」は歳月を重ねる一方、政府による南西諸島の軍備強化や厳しさを増す国際情勢など、「新たな戦前」の岐路に立つ状況が指摘されている。



平和の火（平和の広場）

7月号に誤りがありました。
お詫びして訂正いたします。
・表中央 写真左右反転
・裏右上 ×玉代勢 ○玉代勢

「沖繩戦の真実 風化させない」

知花 昌太朗

私は沖繩県読谷村で平和ガイドとして活動しています。戦争体験を語り続けてきた父・知花昌一の背中を見て育ちました。父はチビチリガマで起きた強制集団死（集団自決）の真実を語り、多くの若者に命の尊さと平和の大切さを伝えてきました。

現在、父が体調を崩しガイドとして現場に立つことが難しくなり、このままだとチビチリガマ・シムクガマの遺族がどのようにして戦後を生き抜いたか、そのことを伝える人間が地元からいなくなるという危機感が私に芽生えました。

昨今、日本軍を美化する発言が多く見られますが、「沖繩のおじー・おばーが嘘をついているとでもいいのかな」というのが私の正直な思いです。だからこそ遺族の証言を、世の中にいかに伝えられるかを日々考えながら活動をしてします。

私は現在三十七歳。私の世代が沖繩戦の話を直接体験者から聞ける最後の世代だと考えています。この世代が「どう行動するか」でこの後三十年・五十年、そして百年が変わってしまうという危機感を持っています。

沖繩戦を風化させないためには、単に知識として伝えるだけでなく、現地での体験を通して「自分ごと」として受け止めてもらうことが重要だと考えています。語り継ぐことは過去と未来をつなぐ行為です。命を守ること、平和を願うこと、その一つ一つの思いを大切にしながら、私はこれからも語り続けていきたいと考えています。